

福岡・觀世音寺僧房跡

- 1 所在地 福岡県筑紫郡太宰府町大字觀世音寺字山ノ井
 - 2 調査期間 一九八〇年（昭55）四月～一二月
 - 3 発掘機関 九州歴史資料館
 - 4 調査担当者 森田 勉・高橋 章
 - 5 遺跡の種類 寺院跡
 - 6 遺跡の年代 奈良～江戸時代
 - 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
- 觀世音寺は天智天皇が朝倉橋広庭宮で崩じた齊明天皇追善のために発願し、八〇余年後の天平十八年（七四六）に完成した。大宰府管内の寺院の上首に位置し、府の大寺としての格式を誇った。今回の調査地は現觀世音寺境内の北側に位置し、その伽藍配置の上では僧房跡ながらも小子房跡に推定される地域にあたる。またここは国指定史跡「觀世音寺境内および子院跡」の一部である。
- 觀世音寺の僧房については延喜五年（九〇五）の『資財帳』にその数や規模などが記載されており、その後の觀世音寺文書においても散見される。昭和五十一年度に大宰府史跡第四三次調査として講堂（現金堂）の背後地区についての発掘調査を実施し、長大な東西棟の建物跡を検出したが、それは梁行四間に對して桁行は一九間以上に

延びるもので、『資財帳』に見える大房の遺構に比定した。今回の調査はこの大房跡の北側に町道を隔てて接する地域について実施したが、その主要な目的は『資財帳』に長一九丈五寸、高一丈、広一丈四尺の二字と記された小子房の遺構確認であった。

その結果、主要な遺構としては平安時代から鎌倉時代にかけての井戸一四基、柵列二条、多数の土壙および溝などを検出した。しかし、ここでは後世とくに近世における削平が著しく、目的とした小房の遺構については確認できなかつた。ただ、土壙と溝によつて囲まれた部分はかなりの広がりをもつにもかかわらず、いわゆる空白になつており、必ずしも断定できるわけではないが、ここに建物など何らかの構造物が存在した可能性が想定された。検出した遺物は、各種の瓦類および土器類のほかに、陶磁器、円面鏡そして木簡などである。木簡は、木簡様木片まで含めると、合計一〇点が出土したが、これらはいずれも土壤あるいは溝から検出したものである。

- 8 木簡の釈文・内容

木簡および木簡様木片一〇点のうち、文字の認められるものは三点にすぎず、他は一点一画の墨痕が認められるものが五点である。また、残りの二点が木簡様木片であるが、そのうちの一点は〇三一一型式に属するものであり、大宰府史跡ではこれが初見例である。

(1) × □ 五十余座祈禱成就圓滿所
 (2) 「□□」

(310)×48×5 081
 119×17×2 033

(3) ×文亀元年

(87)×(23)×3 081

(1)は墨が消えているが、膠質の部分が若干盛り上っているので判読しえた。上端は折損しているが、下端から約六・五cmの位置に釘孔と推定される孔があり、おそらくは何かに釘づけされたものと考えられる。(3)の文亀元年は一五〇一年にあたり、二月二十九日に明応十年が改元された。この部分だけが偶然に残存したもので、内容については明らかでない。大宰府史跡における紀年銘を有する木簡類の出土はこれが三例目である。



観世音寺僧房跡木簡出土地点図

9

関係文献

九州歴史資料館『大
宰府史跡 昭和五十六
年度発掘調査概報』に
報告予定。

(倉住靖彦)

木 簡 研 究 第二号

卷頭言——木簡と墨書土器——

平野 邦雄

一九七九年出土の木簡

概要 平城宮・京跡 平城京左京三条二坊宮跡庭園跡

藤原宮跡 藤原京条坊関連遺構 長岡京跡 平安京左京

内膳町跡 国府遺跡 大阪城三の丸(京橋口)遺跡 木津

氏館跡 下津城跡 城山遺跡 新倉館跡 鴨遺跡 穴太

遺跡 服部遺跡 畑田廢寺跡 下野国府跡 道伝遺跡

払田柵跡 草戸千軒町遺跡 尾道市街地遺跡 安芸国分

尼寺伝承地 久米窪田II遺跡 金光寺跡

一九七七年以前出土の木簡(2)

平城宮跡(第二三次・第一六・一七次・第一八次・第二〇次)

周防鉄錢司跡

木簡と大宝令

中國における雲夢秦簡研究の現状

柚井遺跡出土の木簡

彙報

価格 三五〇〇円 二四〇〇円

岸 俊男
永田 英正
宍原永遠男